

地域おこし協力隊と GIGAスクール構想



熊谷 卓也 (くまがい たくや)

北海道室蘭市出身。道内にてシステムエンジニアや観光協会職員を経た後、2021年に夕張郡由仁町へ移住。同年より同町地域おこし協力隊として着任。

【協力隊に応募した経緯】

学生時代から学校教育現場に関心があり、今なら自身の持つICTスキルを活かした形で携われるのではないかと、思案していたときに、由仁町での募集記事が目に入ったことがきっかけでした。由仁町はその土地として自然が豊かでありながら、ICT普及に対して積極的な姿勢で取り組もうとしていたため、移住決断までの時間はそうかかりませんでした。

【主な活動】

現在、由仁町では3名の地域おこし協力隊が活動しています。内2名は酪農業での活動に従事していて、時間を作りながら地域振興などの場面においても積極的に参加して、一般的な地域おこし協力隊としての任務に日々邁進しています。

一方で私は活動の場を町内の小中学校とし、文部科学省の国策的な取り組みである「GIGAスクール構想」の遂行サポートと、町内のICT利活用推進を主な任務として活動しています。地域おこし協力隊員の中でもその活動は一般的なものではありません。

【GIGAスクール構想】

その構想は文部科学省が「1人1台の情報端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする児童生徒を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育環境を実現する。(文部科学省リーフレット「GIGAスクール構想の実現へ」より抜粋)」ことを目的とした教育改革案ですが、少々難しいお話ですので私見を含めて簡単にご説明すると「学校内でのICT活用を広めて子どもたちの多様性に迎えるとともに、将来社会へ出たときに高いデジタルスキルを発揮してもらえるようにします」ということです。

デジタルスキル習得の重要性についてご説明します。かつてデジタル大国と言われた我が国ですが、現在は国際的なデジタルスキルの水準から大きく遅れをとっている状況にあります。国際経営開発研究所が毎年発表している「世界主要各国の国際デジタル競争力ランキング」によると、日本は全64か国中28位にランクインしておりまして、同じアジア圏においては香港が2位、台湾が8位と躍進するなかで過去最低の順位となっています。その評価で特筆すべきは人材面であり、「デジタル・技術スキル」においては62位と位置づけられています。少子高齢化率が世界トップの日本において、これの意味するところは言わずもがなであることから、デジタルスキル習得およびGIGAスクール構想の重要性がお判りいただけるかと思えます。

【普段の活動状況】

既に由仁町では児童生徒1人1人に情報端末が1台割り当てられています。これを普段の授業に活用するべく教職員の先生方の努力が連日行われており、基本的にはこれをサポートして校務の円滑化などに繋げることが私の主な役割です。また、普段の学校生活において「ICT活用の機会」を探り、効率化が見込めるものであれば提案・導入することもあります。実際の授業では「ドローンを用いたプログラミング」や「Webページの作成」、「情報モラル」などにサポート講師と

して参加し、解説や実指導なども行っております。

また、ICTの利用率はそのコンテンツ数に比例しますので、校内行事などのデジタル素材（自主撮影した静止画・動画など）を多く提供することで、先生方が作成する学級だよりなどに活かしてもらうことも重視しています。

【注意していること】

子どもたちにICTを学んでもらう際には必ず「ICTを身近に感じてもらうとともに、その正しい活用を学んでもらう」ことを心がけています。今の子どもたちはその生活環境から容易にデジタル世界に身を置くことが可能です。だからこそ、その有用性やリスクに対して自らマネジメントさせる教育が最優先課題ではないかと考えます。「デジタルでは相手が見えないから怖い」と教えるのではなく、「デジタルだからこそ相手の心を思うことが大切である」といった考え方こそ、デジタル社会における多種多様なリスクから身を守る術の1つであるからです。

【やりがい】

サポート要員としての立場上、教職員の先生方をはじめとする学校関係者の皆さんが、GIGAスクール構想に対して前向きであることが一番のやりがいです。また、子どもたちの吸収力や想像力に驚かされることも多く、学校関係者でコロナ対策としてICTの活用を検討している中、子どもたちからも多くの提案が次から次へと出てくることもあり、思わずニヤリとしてしまいます。それはやりがいというより楽しみに近いかもしれません。

【困ったこと】

一番は導入する端末や通信機器などの選定に携われなかった（協力隊としての契約時期が合わなかった）ことです。情報機器の導入は「実運用において統一されたフォーマットを見出す」ことが重要です。ある場所では出来たことが別の場所では出来ない！といった



リモートでオンライン授業を実施する練習を授業で行いました

事態を避けることこそが情報スキルの共通化を生み、ICT機器の活用を浸透させる要因にもなります。ここに携われなかったことが現在の活動（町におけるGIGAスクール構想の推進）を困難にしている点に繋がっています。

また、現場におけるICTの活用は、時間経過に比例して成果が現れるものであります。従来のペーパー主体で行っていた授業をデジタルデータへ転換することだけを考えても容易なものではありません。その導入からスキル習得・安定運用までに最短でも1～2年以上は必要です。しかし、地域おこし協力隊としての任期は最大3年間でありますので、任期中にできること・実際に行えることが限定されてしまいます。

また、人口過疎地では地域おこし協力隊として求められている独立起業が非常に難しいことも悩みの種です。学校現場にどう携わり続けることができるのかは、個人での判断や行動だけではどうにもならないため、数年後の将来を見越した活動をより困難なものにしています。

【今後に思うこと】

今現在の状況を、10年前に「こんな世の中になるであろう」と想定していたでしょうか。振り返った多くの人が「それは予想がつかなかった」「起こりえるとは思えなかった」といった感想をお持ちになることでしょう。それはこの先の10年も同じです。

ですが、ひとつだけ予想が付くことがあります。それは「業種や産業に分けられることなく、ICT無しでは成り立たない社会であろう」ということです。そして、その世の中で生きるのは我々ではなく今の子どもたちです。デジタル技術において国際的に大きく後れを取った状況で、無責任に「さあ、ここから頑張らなさい！」と送り出したくはありません。今を生きる大人として、出来る限りのことをしてあげたいと思います。



子どもたちが作った由仁町を紹介するWebサイト